
「時効不成立」 3

長根兆半

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「時効不成立」 3

【Nコード】

N2988F

【作者名】

長根兆半

【あらすじ】

英国にきた。そこでの出会いから、もう一人復讐に燃えている女と出会う。

異文化の中で

「時効不成立」 3

第2章 異文化の中で

狭間良孝がロンドン・ヒースロー空港に降り立つと、冷たい空気が身をめた。

片言の英語もしゃべらないように、と言われていたので、何も言わなかったが、差し出した書類を見て、向こうが勝手に入国の判を押していた。

幾分うるつき加減に表に出ると、自分の名前が書かれた、画用紙大の紙を持っている美人が目についた。

ややウエーヴのかかった黒髪の裾から、首筋が美しく見える。

白いブラウスに空色のスーツ、膝小僧すれすれのタイト・スカート、その上に、薄いベージュのバーバリー七分コートのボタンを外して、羽織っている。

三十代前半の若い丸山登美子だった。

彼女は、日英生地貿易商の間黒豊明の紹介で来た狭間良孝を、空港に出迎え、丁寧に挨拶をすると、駐車場に向った。

空港の駐車場に停めてある車は意外に埃っぽく、長期利用を思わせている。

丸山の後ろを歩きながら、狭間は女優の若尾文子に似ているなと思った。

埃っぽい満車に混じって、一際目立つメタルレッドのフォルクスワーゲン・ゴルフに乗り込むと、ゆっくりと駐車場を出た。

空港の敷地を離れた頃、長い地下道に入った。

かなりの交通量だったが、そこを抜けると、いたるところに林のよちに木があり、丘は、緑の絨毯と言うにふさわしい芝生で覆われて

いた。

その中に赤いレンガ造りの住宅が混在し、近代的なビルディングがあり、さすがに外国だと、その景観に狭間は見とれた。

車内は女性オーナーだけあって、綺麗に掃除がされ、僅かな香水か、オーデコロンの香もした。

それに混じって、女の香も漂っていた。

高速道に入ると、車の流れは想像以上に滑らかで、最高時速は一〇〇キロと言いながらも、一二〇・三十キロで走っていた。

ロンドン市内に入ると、さすがにスピードは落ちた。

信号の無い歩行者用のゼブラ模様に、歩行者が足を踏み入れると、車は静かに止まった。

狭間は、流石ジェントルマンの国だなと、感心した。

鈴掛けの大木の並木が、切れ切れとはいえ、いたるところにある。

やがて車は、取り立てて大きな建物は無いが、棟続きの繁華街に入り、電気店の前に止まった。

車内の暖房に慣れたせい、ドアを開けた瞬間、乾いて冷たい空気が気持ちよかった。

後から車を降りた丸山登美子が、ここです。と言った所は、三階建ての二階だった。

入り口の、覗き窓のない木製のドアを開けると、一階への左の通路と並んで、二階への幅広の上り階段が右にあった。

上って踊り場に立ち、部屋のドアを開けると、靴脱ぎ場があり、左にすぐ、ドアの付いたバス・トイレがあった。

全体が白に近い薄い灰色で明るい部屋だった。

二十畳位の大きな一間の部屋の奥、左片隅に、L字型にキッチンが据えられ、電気オーブン付きの調理器と、流し台が並び、食器を仕舞う天袋があった。

流しの左手には洗濯機も有り、反対の右には洋服箆笥が据え置かれている。

そのキッチンスペースは、横幅四メートル、奥行き二メートル位の板の間になって、あとは濃紺のカーペットが敷かれ、箆笥の手前、板の間と直角に、ダブルベッドが壁に沿ってあった。

入り口に立って右手に、大きな二つの窓があり、レースのカーテンがかけてあり、緞帳のようなワインカラーのカーテンが、左右に分けられ、窓脇に縛られていた。

窓の下には、それぞれ暖房用のパネルがあった。

「どう、気に入ってもらえたかしら」と丸山がそう言っ、ベッドに腰を下ろした。

「豪華な部屋ですね、買い物も近いし、便利そうで気に入りました。有難うございます」

「荷物は、後から来るの？」と丸山は、まさかと言う顔で言った。

「いえ、これだけ」と狭間は、黒い庖丁ケースと買い物袋を揺すった。

「え、随分あっさりね。でも、楽しみが有っていいかもしれないわ。この夜具、一・二度使ったきりで、洗濯もしてありますから」と言っ、丸山が顔をほてらせた。

「後は全部、大家さんのですから、なくしたり、壊したりしないようにしてくださいね」と丸山は照れ隠しのように言った。

「へー、全部、ですか？」と俯きかげんに狭間は言た。

「嫌ね、変なこと考えないでください」と言っ、丸山は再び顔を赤くした。

「え、べ、別に、かまいませんよ。英国っ、便利ですね」

「日本と、そこが違うのよ。どんなに外が寒くとも、部屋の中は暖かいから、寝る時でも、毛布一枚で充分なのよ」と丸山は言いながら、小さなカメラをカバンから取り出した。

そして部屋の隅々からバス・トイレの隅々まで、フラッシュを使って撮り、天袋と、キッチンの下の仕舞い棚のドアを開け、撮影をした。

「その写真、どうするのですか」と狭間は、何か疑われでもしてい

るような気分になって聞いた。

「ここを契約する時は、大家さんの前でも撮って置いたの、日付が入っているから、おかしいことになった時の証拠になるの」

「おかしい事って？」

「例えば、ほら、この傷」と言つて丸山が筆筒の角を示した。

「ここを出る時、この傷は住んでいる人がつけたから、損害賠償してくれ、なんて云われかねないのよ。ところがこうして証拠の写真を見せれば、入る以前から、有つたと言う事が出来るわけ、日本では、そんな事言いたくないし、言われたくもないから、初めから何も置いていない、と言うわけよ」

「なるほどねえ」

「釘一本打つにも、大家さんの承諾書が要る訳、だから便利に棚を付けようなんて、して欲しくないのね、それとタバコ、これは充分気をつけてください。浴槽も、週に一度は石灰を洗い流すようにね」

「なんですか、その石灰って？」

「英国の水は、多量に石灰分がある硬水なの、水回りには、石膏のようにこびりつくの、それを洗剤で、洗い落としておかないと、積もってからでは大変ですから、それと」と言つて丸山は入り口のドアに向かった。

「このドア、錘やバネが仕込んであつて、自動的に閉まりますから、出る時は必ず鍵を持つて出るように」と言つて、彼女はドアを開け、蝶番の付いている方の、ドアの淵の陰から壁の中に伸びている、自転車のチェーに似た鎖を指差した。

なるほど、開けたドアは、ゆっくりと動いて、カチツとロックの音がして、閉まつた。

「それじゃ明日、お店に案内しますから、近いんですけど、お迎えに来ます。それとも、これからお店に行つて見ます？」

「有り難いですが、今は勘弁してください。眠いのですけど」と狭間が言つと、丸山はふと時計を見た。

「アラ、うつかりして、狭間さんは今、真夜中モードだものね。店はすぐ近くなのですよ。歩いて五分ぐらい。お疲れでしたのに、気が付かなくて、ごめんなさい」と丸山は、ヒースロー空港に彼を迎えに行つて、年甲斐もなく興奮している自分を、少し照れた。

狭間良孝は、案外に素直な彼女に、好感を持った。

こうして、狭間良孝のロンドン生活が始まった。

丸山登美子が、薄いピンクのワンピースにバーバリーを羽織り、黒の革ジャンを着た狭間良孝を車で迎に来た。

社宅の前から狭間を乗せた車は、程なく公園の近くに停った。

「随分と早いですね。こんなに近くなら、言ってくれば、一人でも来れたのに」と言つて狭間は車から降りた。

「ここ、丁度お店の裏の通りになるのよ」と丸山も降り立って言った。

低めの黒いヒールを履き、背をすっきりと伸ばし、手にはイヴサンローラのカバンを持つて先に立ち、小気味のいいテンポで歩き出した。

狭間は、それにしても、空港から出る時も、出てからも、日本女性を見たが、誰もが、その歩き方は、足をピンと伸ばさずに歩を運ぶ、どこか自信のなさを感じたが、丸山登美子は違うな、と思った。

その後姿に彼は、十歳に近い年の差がある若い女性経営者の丸山登美子に、何かくすぐったい心地よさを感じた。

道を左に曲がると、丸山が、木枠にガラス張りの片開きの小さなスウィング・ドアの前に立った。

「小さいけど、場所がいいし、レイ・アウトはお任せしたいと思つていますから、あとは設備をどうするか、何が必要か、言つて下されば購入しますから」と言つて丸山が店のドアを開けた。

「まだ開店はしていない。と聞いてはいましたが、遣り甲斐がありますね」

「寿司丸」に生まれ変わろうとしている店は、ウエスト・エンドレ

ーンの通りに面し、間口は狭いが、奥行の有る鰻の寢床を思わせ、地下室もあった。

階段を下りて地下へ行くと、すぐ正面にトイレがあった。

階段の真下を物置にし、反対側を仕込み場に出来ると狭間は思った。トイレの反対の奥は、小さいながらも事務所を置く事が出来る面積だった。

上の店内は、丁度事務所の真上に当たる所をキッチンにし、客席との境に寿司のカウンターを設置するようにした。

狭間は、だいたいのレイ・アウトと、寸法を大工に指示し、表に出た。

彼女の運転するゴルフに乗って、必要最小限の厨房設備を注文した。注文先を回って店に帰り、隣の喫茶店に入った。

「寿司ケースは日本から来るということですが、サイズはわかりますか？」

「これがカタログ」と言って、丸山がカバンから取り出し、狭間に渡した。

「ああ、これだと、カウンターのくの字の角に丁度納まりますよ」

「アラ、さすがね、あ、滞在届け、出しておいて下さいね」

「なんですか、それ、どこに出すのですか？」

「別に強制じゃないのですけど、在英日本大使館へ、届けることになっっているから」

「どこにあるのですか、それ？」

「グリーンパーク公園の前なのだけど」

「ってどこですか、わかりませんよ」と狭間はどこか甘えるように言った。

「アラ、そうよね、でも、今日は忙しくて、案内できないので、地図を見て見学かたがた行ってみてはどう？」

アラ、というのが、彼女の口癖のようだった。

「それもいいですね」

「じゃ、また夕方、五時頃、大工さんが帰る頃に、お店でお待ちし

ていますから」

二人は喫茶店を出ると、丸山は停めてあったフォルクスワーゲン・ゴルフで、去った。

狭間は教えられたように、電車バス兼用のワンデュー・チケットを、ウエスト・ハムステット駅で買い、地下鉄ジュビリーラインに乗った。

彼は日本大使館へ行く気はなく、オックスフォード・ストリートで降りた。

混雑は、東京のラッシュアワーと変わりがないと狭間は思いながら、地下から地上に出たが、そこも同じだった。

始めて、東京の上野駅に降りた、あの朝の感覚が蘇った。

あれは丁度二十年前の、極寒の二月だった。

狭間良孝と三浦美智雄が、恩師の紹介で料亭『上総』に高校の新卒で、弟子入りすると言う事がもてはやされたのだったが、二人は半年もしないうちに、畑山源太の、ホモ行為に悩まされる事になったのである。

彼は痩せ小柄な、店の専属運転手で、年は三十前後と言うが、髪の毛は薄く、神経質そうに、掛けている眼鏡をいじりながら歩く、せっかちそうな男だった。

二人が部屋で酒を飲んでいると、どこか先輩ズラをして必ず入って来て、ほどほどにして寝ると言うと、源太は大人しく帰るが、二人が寝付いた頃を見計らい、彼らの寝ている部屋に戻ってくるのだった。

すると、いきなり三浦が、大声で怒鳴っていた。

始めの頃こそ、狭間は、なぜ三浦が怒鳴ったのか知らなかったが、一年が過ぎ、店が暇になった夏、三浦が、痔の手術で入院し、そこへ見舞いに行った時に解った。

「どうだい、調子は？」

狭間は何の気なしに、病院のベッドに寝ていた三浦に声を掛けた。

「ん、大丈夫だよ。それより狭間」

三浦は言葉を切って、何かを言いよどんでいた。

「どうしたい。店の事なら、暇だから心配ないぞ。ニツパチって言うて、二月と八月は暇なのだそうだ」

「そんな事じゃない。あの源太、気を付けた方がいいぞ」

「なんだい、なにかあつたのか？」

「恥かしいが、お前にだけは言つて置きたい、あいつ、ホモ野郎だ」

「え、なんだつて、ホモ」

「ああ・・・」

「先生に相談したのか？」

「したよ」

「なんだつて？」

「へらへら笑つていただけだよ」と三浦は投げるように言つて、ふてた顔をした。

「それだけか？」

「どっちかと言うと、店では暗黙の了解のようだよ」

「な、なんだつて、親方もか、総帥は知っているのか？」

三浦は、疲れたのか、俯いてしまった。

そして三浦は、退院すると自宅療養ということで帰り、そのまま店には戻つてこなかった。

やがて秋の結婚シーズンが近づき、店は再び忙しさが続いた。

当然飲む機会も増えた。

明けて、一九六九年の松飾りも取れ、「上総」の内輪で、去年より、雪の降る日が多いといつて、雪見酒があつたその日、なぜか畑山源太は酒を飲まなかった。

「リヨウ、ドライブしないか？」と源太が狭間の部屋に来て言つた。三浦美智雄以外の人は、狭間良孝を、そう呼んでいた。

「ドライブ、どこへ、第一雪が降っている夜中に、危ないじゃないですか」と狭間は、部屋の入り口に立つている源太に言つた。

「なんだ、以外に度胸がないな」

そう言われて、狭間はムキになった。

源太は、白いトックリセーターに、白いジャンパーを着て、立っていた。

「寒いから、嫌ですよ」と狭間が断ると

「車の中は寒くないから心配ない」と言って源太が狭間の腕を掴んだ。

狭間は源太の、どこか軟弱な力に促されるように、従った。

外は、肌を刺す粉雪だった。

車は五分も走っただろうか、人家も見えない路の脇に止まった。

「引き返した方がよさそうだな」と源太は独り言のようにつぶやくと、狭間の太腿に手を伸ばした。狭間は暖房の効いた車内でまどろみ、源太の手を感じると

「止めて下さいよ、源太さん」とまるで寝言のように言った。

「いいじゃないか、ここまで来たのだし」

「勝手に連れてきておいて、何するの？」

だが源太は、狭間が強い抵抗をしないのを良い事に、図に乗り、手を止めようとせず、狭間のズボンのファスナーを下ろしにかかった。

狭間は、その手を捻り上げ、

「いい加減にしろよ、三浦が言ったことは本当だったな。残念だが、俺にその手の趣味はねえ」と狭間は静かだが、野太く言つと、さらに「サツサと車、店に戻せよ、え、おい源太」と凄んで言つて、キジも鳴かずに撃たれまいって事知ってるか、と付け加えて、睨み付けた。

源太は、主人の顔でも思い出したのか、あっさりと車を出し、店に戻った。

雪の降り積むその翌日の午後だった。

何の予告もなく、狭間の母親が店に来た。

「どうしたんだい母ちゃん？」

「良孝、大変なことになった」

「だからさ、なんだい、何があった？」

「父ちゃんが、父ちゃんがな、事件を起こしてしまった」

「何やったんだ、又喧嘩か？」

「い、今、古川刑務所に居る・・・」

「・・・刑務所・・・何時の話だ、それ？」

狭間は何も知らなかった。

事件を起こし、警察に捕まったと言うならまだしも、いきなり刑務所とは。

古川刑務所は、車で店から十分位の距離の所にあり、一度、客からの注文で、差し入れを配達した事があった。

狭間は、親方の権堂和夫に、一寸出て来ますと言って、外の母親の所へ行った。

母は、ガラス戸越しに見える帳場の「上総」の親方に向って、ぺこりと頭を下げ、背を丸め、辺りを憚る様に小さくなって歩きだした。狭間が、何やったんだ。と母に聞くと、自分の口からは言えないから、父ちゃんに会って話を聞けと言った。

庭は昨夜からの雪で、築山が溜息の出るほど見事に、白く着飾っていた。

雪は小降りになったとはいえ、まだ降り続いていた。

狭間が今朝、一番に雪かきをし、築山の周りに雪道を作ったのだったが、そこは既に白く、かすかな地面を感じさせるだけになっていた。

雪の町をしばらく歩き、やがて、雪に覆われた灰色の大きな建物の前に出た。

高く、長い大きなコンクリートの塀は雪溶けに濡れ、黒ずんでいた。聳え立つような鉄格子の門の脇に、黒いオーバーコートを着た男が、小脇にカバンを抱えて立っていた。

母親は良孝に弁護士だと紹介し、彼を次男だと言った。

弁護士が、小さな鉄板の扉を開けると、三人はそこをくぐった。

塀の中の庭は、降るに任せた雪に覆われていた。

「スイマセン、あのオ、親父、何やったんですか？」と狭間は弁護士に聞いた。

弁護士は、何の感情も見せずに黙って、薄くらい頑丈そうなガラス戸を開けた。

入るとすぐ右の部屋には、ドブねずみ色の制服を着た看守がいた。

弁護士が、その小窓で何か話をする、軽く頷き、奥に向かって歩き出した。

その後ろに二人は付いていった。

薄暗い空間に、裸電球一つだけが宙に浮かんで、頼りなく灯り、それは黒いコンクリートの額縁に収まった絵の様だった。

艶の無い木の長椅子に座るまでの時間が、とてつもなく長く感じられた。

弁護士は、二人をそこに座らせ、どこかへ消えた。

狭間が、傍の母を横目で見ると、俯いて息を殺しているのが判った。どこかでドアの音がし、目を向けると、開けたドアから顔を出している弁護士が、狭間を手招きしていた。

その部屋も、裸電球一個あるだけで、何も無いコンクリートの箱だった。

「貴方のお父さんは、強姦未遂で逮捕されました」と弁護士が低い淀みのない声で、それだけ言ったその瞬間、狭間良孝にとって部屋は、泥の中のような静けさに、押しつぶされていくような空間に変わった。

狭間良孝はオックスフォード・ストリートの混雑の中で、歩きながら思った。

どうしてあの時期に、ホモ野郎、親父の事件、文通相手からの不通と、事件が重なったのだろっ……。

母に言われて、保釈金十万円を、給料八千円の中から貯めた金を手渡した。

翌日からは、まるで何も無かったように仕事が始まった。新年会シーズンも終わり、暦は極寒の二月になろうとしていた。

誰も狭間良孝の家庭の事に触れることも無く、誰もが何食わぬ顔で、日が過ぎていった。

いつものことながら、朝七時に起き、冷たい空気を掻き分けるように部屋を出、手をこすりながら庭の雪をかき、帳場を掃除し、厨房の準備をしていた。

ふと廊下に、せわしげな足音を聞くと、狭間は顔を上げ、なぜこんな早く源太が、と小首をかしげ、仙台に月末の買出しでもあるのかと、思った。

厨房の入り口まで来た源太が

「なんだ、ここ汚いじゃないか」といきなり言い出した。

「あ、窓はこれからです」と狭間は盛り台を拭きながら言った。

「まったく、親が親なら子も子で、駄目だ」と吐き捨てるように源太が言った。

「今、なんか言いましたか？」と狭間は源太に近寄り、いきなりストレートを放った。

見事にヒットすると、源太は廊下に飛んでうずくまり、這いずりながら、手探りで眼鏡を探し、起き上がろうとしている傍に、狭間は仁王立ちに立った。

「そんなに俺や三浦を虐めて、楽しいのか？」

「ふん、修行だよ」と言つて源太は、薄笑いさえ浮かべた。

口から流れる血を手の甲で拭き、さらに何かを言いかけた源太を、狭間はその襟首を掴み、ゴミ袋を引きずるように源太を厨房の中に引きずって行き、洗ったばかりの大きなポリ容器に、源太を頭から突っ込んだ。

騒ぎを聞きつけた店の者が来ると、口々に、狭間良孝に、謝れと迫

った。

狭間は、テーブルを拭いて、そのままにしてあつた雑巾を掴むと、思いきり床に叩き付けた。

部屋に走り戻つて、呆然と突つ立っていたが、そそくさと庖丁を細長い黒いカバンに詰め、表に飛び出していった。

家には行きたくないとなれば、足は自然に松島に向かつていた。

松島の親元で、うなぎ職人の修行をしている小野寺正則に、こうした事があるから、店に居辛くなつたと、相談した。

彼は、狭間に、人の噂も七十五日だから、ほとぼりが冷めるまで、そこにいたらどうかと、年の割には落ち着いたアドバイスをした。

同級生のアドバイスに従つて、狭間は頷いた。

狭間良孝にとつて、小野寺正則は高校の友人で、学校の休みには、アルバイトをさせてくれた。

松島の小野寺が、心配の電話を狭間によこしたのは、間もなくの事だった。

（居辛くなっていないか？）

「相談したい事が山ほどあるんだ」としか狭間はいえなかった。

（なんだよ、水くせえな、いつて見るよ）

「電話じゃ、いえねえ」

（来いよ）

「休めねえ」

（じゃ、俺が行く、いいか、はやまつた事、するなよ）

翌日、小野寺正則は、関光男と高橋正美の三人で狭間を訪ね、『上総』に来た。

狭間は親方から時間を貰い、近くの喫茶店に四人で行つた。

「何、ホモ、ホモ野郎がいるのか、あの店に？」

「とにかく、毎晩だ、叩殺したくなる」

「ヤバイな、狭間」

「松島に、来いよ」

「正則、おめえつてよ」と言う狭間の声が詰まった。

「なあに、バイトの時からお袋が言ってた。おめえら兄弟だって、で、狭間、どうするんだ？」

「にげる・・・」

「理由を、言ったほうがいい」

「なんかいも言った。だめだ、誰も知らん振りだ。三浦の時とまったく同じだ」

「親方もか？」と関が呆れた。

狭間は首を、こくりと下げた。

「解った、お前らを紹介した幸助先生は探すだろうが、俺の所でくい止るから来い」

「正則に、迷惑かける事になる。駄目だ」

「どうする？」

「二月二十八日、俺、東京へ行く」

「なんでだ。今から来いよ」

「借金が有る、払って出る」

「金、あるのか？」

「ない」

「とにかく、その日、迎えに来てやる、又考えよう」

その日が来て、狭間は日の射さない暗い部屋で、荷物をまとめ終わり、その上に、借りた現金二万円同封の、置手紙をした。

茶の間でテレビを見ていた親方と夫の祖父母、料亭「上総」の包丁人・総帥・権堂久次郎と海老子に、飲みに行きますと、いつもより丁寧な挨拶をした。

狭間良孝は、飲みに行つて来ます。とは言わなかった。

「疲れが取れたら、すぐ帰つて来いよ」と総帥の優しい声がした。

疲れたら・・・か、総帥、俺、もう疲れてますよ。と狭間良孝は心で言った。

表のくぐり戸を出ると彼は、「上総」を振り仰ぎ、頭を深々と下げ、

無言の挨拶をした。

古川駅で、三人が待っていた。

「狭間、これ持って行け」と正則が言って、白い封筒を、狭間のポケットに突っ込んだ。

古川駅から東北本線の小牛田駅で、関と高橋は降りた。

小野寺正則は、狭間良孝を仙台駅まで送ってきた。

東北本線、仙台駅から東京まで、鈍行六時間の距離を、転寝さえも出来ないままに、乗降客で込み合う上野駅に着いたのは、明けて三月の朝だった。

桜の蕾もまだ固い上野駅に、狭間良孝は立った。

行く当てなどなかった。

とにかく住み込みか、寮の完備している求人広告を探す事が第一だった。

それに見合った求人が、浅草の喫茶店にあった。

行くとその場で採用された。

幾日か経って、東京に三月の雪が降ってきた。

降る雪は、東京のネオンや街灯を、真綿で包むように静かに降っていた。

店から寮へ帰る深夜、狭間は突然、咳き込んだ。

タバコの吸い過ぎかなと思ったが、なお咳き込んだ。

喉に付いた痰を、ペツと雪の上に吐いた時、そこを赤い血が染めた。狭間良孝は、心細さに拍車がかかり、東京から逃げるように大貫に戻った。

大貫の家にまだ、父の良蔵は戻っていなかった。

正則にだけは電話をしようと、隣の遠藤マーケットから松島に電話をした。

（電話じゃだめだ、とにかく、すぐ来い）

怒鳴るような、その正則の電話に、狭間は胸が熱くなった。

狭間は、小野寺正則の居る料理屋「石田屋」に行った翌日から、仕

事をもらえた。

松島の観光シーズンが、島から上がる花火大会で区切りがつく九月になった。

「おい、狭間、店の表に、誰か来てるぞ」と小野寺が言った。

表に出て行くと、大貫の家の隣で、理髪店をやっている伊田作だった。

彼は、狭間の頭髪が伸びると、自分の好きなように切って良いか、それとも、良孝の注文通りにやるか、どっちがいい？ と聞き、狭間はいつも、好きにやって良いですよ、その代わり、只、と言って任せてしまえる理容師だった。

暇な時は、女性のような髪形から始まって、少し前髪を残す舟木がり、最後は決って、角刈りにいくらか丸みの有る潮来がりだった。たつぷりと時間をかけられると、何時しか狭間は眠ってしまうのが常で、ある時などは、ツルツルと頭を撫でられて目が覚め、鏡に映っている自分を見ると、スキンヘッドにされていた事もあった。

髪が指櫛で摘めるようになるまでの、中途半端な二・三か月間は、さすがにそれは嫌だった。

そして、後頭部の髪の伸びが早いとか、お前の髷って、顔で渦を巻いているから剃り難い、などと言っていた。

狭間良孝はその伊田作が、松島見物にでも来て、飯を食いに来たらいいに思い、表に出て行った。

「めずらしじゃないの、水族館でも見に来たの」

「良孝、喜蔵さんが死んだんだ」

「え、誰？」

「喜蔵さんだよ。良孝の父ちゃんの兄貴、喜蔵さんが死んだんだよ」

「どうして・・・？」

「話しは、後にして、とにかくすぐ大貫へ行こう」

狭間は、分かったというと、そのことを正則に話し、取る物とりあえず、彼の車に乗った。

「お前の父ちゃんが出てくるの、知ってるだろ。喜蔵さんはその身元引受人として働いていた時、バイクで車にぶつかってしまったんだ」

伊田作は車の中で狭間に、事の成り行きを話した。

狭間は、庖丁の重さと同時に、そこに宿る業のようなものを見た気がした。

一本の庖丁が、一人の罪人と死者を呼んだのではないかと思うと、生半可なことでは板前にはなれないと思った。

親方の和夫が、負けずに頑張っただけ。と言った事を聞いたのは、初めて親父と「上総」行った時だった。

何に負けるなと言ったのか分からなかったが、今、分かるような気がしてきた。

些細な事が、人の運命を決め兼ねないと思うと狭間良孝は、小さくなっていく自分を感じ、その運命を、幸福の彼岸に運ぶことは出来ないものかと、思った。

「ここで事故に遭ったんだ」と伊田作が言って、車を止めた。

そこは、やがて北上川と合流する堀に沿って、登米―古川間を結ぶ陸前バスの通りと、左からの下り坂がそのバス通りと交差し、橋を渡り、右の田園へと続く十字路だった。

左の坂は畑の中にあり、右の道は田園の中に在った。

周りは畑と田圃だけの、見通しの利く場所にもかかわらず、バス通りを走っていた二トントラックとバイクは正面衝突した。と彼は言った。

「トラックの運転手は、バイクが坂を下りてくるのを確認していたが、自分の方が優先走行である為、バイクが一旦停止するものと思い、スピードを落とさなかったそうだ。

ところがバイクは、バス通りが目の前に迫ったにもかかわらず、ス

ピードを緩める気配すらなく、そのままトラックの前に出て来たと言う。

トラックの運転手は、急ブレーキを掛けたが、既に遅く、バイクは、バス通りの側を流れる堀にバウンドして突っ込んだ。トラックは制限時速を守っていたが、舗装されていない道だったから、十メートルものスリップ後が有ったよ」と伊田作は言つて、車を発進させ、左の坂を登って行つた。

狭間は、口にこそ出さなかったが、事の顛末が見えるだけ、暗い空洞を歩くような重苦しい葬儀を終え、再び松島に戻つた。

その後、割り方三年、焼き方一生と言われるウナギを、五年間やり、東京に出て、寿司屋、天麩羅屋と、店を渡り、いつしか流れ板前になつていた。

あれから二十年か、と狭間良孝は、オックス・ストリートの喫茶店で目を細めた。

その間に、両親は死に、お袋最後の手料理となつた卓袱台に置かれた御飯、白菜の漬物、きんぴらごぼう、団子のような野菜の天麩羅、沢山の茗荷が入った豆腐汁、あれはお袋の味、もう食えないな。と思つた。

腕時計をみると、四時半になつていた。

来た行程をそのまま帰り、店の前を見ると、既に丸山登美子のゴルフが止まっていた。

スイングドアを引いて入ると、木屑と埃が床に貯まっていた。

「ね、このカウンター少し広過ぎないかしら？」

「座つてみてください、落ち着くサイズなんですよ」と狭間がカウンター用の椅子を引き寄せた。

「アラ、そうね、落ち着いて、ゆっくり、沢山食べてもらえそうね」と丸山は言つて、体をねじり、レジカウンターを向くと、どうしてあそこの高さは九十二センチとカウンターより高いのかと聞いた。

「ええ、聞いた話なんです、人間がお金を出し入れするのに、一番抵抗を感じない高さなんだそうです。それ以上でも以下でも、心理的に違和感を持ってしまふんだそうです。機材は何時来ますか？」

「そんなもんかしら、一週間以内とってたから、もう少し後ね、その間に、魚屋さんを当たってみましょ」

「日本と同じくらいに、食材は手に入るんですか？」

「大丈夫よ、ロンドンには今、百店舗以上も日本食のお店が出来て、食材のお店も結構忙しいから」

「え、そんなにあるんですか」

二人はいつしか、砕けた話し言葉になっていた。

「それで従業員、ウエイトレスとかウエイターはどうするんですか？」

「来週の新聞に載る予定で、募集広告を出してあるから、電話が来たら面接しないかね。在留届、どうでした？」

「あんなの、なんの役に立つんですかね、九月四日と書いて、苦勞して死ぬか、って思ってしまったよ」

すると丸山が、鈴を転がすような声で笑い出し

「お店のために、そうしてくれると嬉しいわね」と冗談とも本気とも取れる言い方をし、狭間を見つめ、心なしか目を潤ませた。

狭間は、ドキッとしたが、嬉しさの欠片だけを顔に表した。

間口は狭いが、奥行きのある店内。

入り口に向ったキッチンと六人がけカウンター。

全体が白黒のツートンカラー。

入って左右の壁は鏡張り。

三つの四人がけテーブルといった、いたってシンプルな内装の店が出来上がった。

合計二十二の客席、従業員数、延べ八人、常時三人、土日で四・五人という、小さな「寿司丸」は十二月一日開店と決った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2988f/>

「時効不成立」 3

2010年10月28日08時03分発行